

【ニュージーランド短期語学留学】

New Zealand でのファームステイ

佐久間 有紗（東北公益文科大学公益学部3年）

私がファームへのインターンシップを決めたきっかけは実家が農業をしていることもあり、外国での農業はどのようなものか体験したかったからだ。日本とニュージーランドは季節が逆であったため、季節の関係で農作物では行き先がないかもしれないとのことだった。そこで日本では体験できないようなことをしてみたいと思い、ファームへのインターンを決めた。

私はインターンシップ中のホームステイ先に関して混乱してしまった。そもそも、インターン先は留学が始まる前から決定していたが、インターン中のホームステイ先は留学が始まってから連絡が来ることになっていた。私はファームでインターンすることはファームステイになることを知らず、ステイ先の連絡がこないと日本に残った先生に相談して心配をさせてしまった。私がファームステイであることを知ったのはインターンを計画してくれている現地のスタッフの方と電話をした、インターンが始まる1週間前だった。

私がファームステイでお世話になったのはリンディー(Lindy)とロス(Ross)のウィルソン(Wilson)夫妻だった。そして動物の世話を手伝えるために住み込みで働いているアーサー(Arthur)もいた。インターン中はアーサーが私に様々なことを教えてくれ、一緒に作業をしていた。子供はいなかったけれど、ほぼ毎日ウィルソン夫妻の娘さんが子供たちを連れて遊びに来ていた。そして馬が5頭、アルパカが2頭、牛が1頭、犬と猫が1匹ずつに羊が数十頭という大家族だった。さらにウィルソン夫妻の家はファームステイでは有名らしく、自分で会社を通して留学に来た人が私の他に2人(マサエとサヤカ)いた。この2人はインターンではなく、動物と触れ合うことが目的のファームステイだった。ロスは「2人はファームステイで有紗はワークステイだね。」と言っていた。

私が手伝った作業は主に4つだった。1つ目は馬糞拾いだ。ウィルソン宅では乾燥させた馬糞を肥料として使っていた。そのために麻の袋に馬糞を拾い集めるのが私の仕事だった。匂いが心配だったが、馬は牧草しか食べないので糞からは牧草の匂いしかせず、全く気にならなかった。単純な作業ではあったが、いっぱいになった麻の袋はとても重くなって大変だった。

2つ目は柵の修理の手伝いだった。動物たちを囲っている柵は金属の線で囲った上から木材で固定していた。この木材が劣化しているものやずれてしまっているものを修理する作業だった。アーサーが金属の線と木材を固定する金具を金槌で打ち付ける際に、木材が動かないように固定することが私の仕事だった。斧のような柄の長いもので支えた。柄が長い分、打ち付けた時の振動が体に強く響いて大変だった。この次の日はほぼ全身が筋肉

痛になってしまった。

3つ目は木材を使って格子状のものを作る作業だった。アーサーが木材を適切な長さに切断し、私が切断された木材を並べ、釘を打つことが私の仕事だった。針がしっかりと刺さっていないときや木材が曲がっているとやり直した。やり直しのときはアーサーがほとんどしてくれた。とても申し訳ない気持ちだった。私と与えられた作業にチェックが入るのは初めてのことだった。ただの手伝いではなくインターンであることを自覚した瞬間だった。

4つ目はリンディーが手入れをしている庭のごみ拾いだ。ゴミといっても切り落とされた余分な枝や木材を運び出す作業だった。このとき私は軍手を持っていなかったの素手で作業をしていた。そのことに気づいたリンディーから「どうしてあなたは軍手をしていないの？」と言われた。私は気にしていなかったのだが危ないと注意された。リンディーは元々口調が強めだったので怒っているかいないかもわからず、私は謝ることしか出来なかった。するとリンディーはアーサーに色々話していた。前回に引き続きアーサーに迷惑をかけてしまったと反省した。

この日、私は初めてマサエとサヤカにインターンは大変だと話した。元々大変だったが、楽しく出来ていたので毎日楽しいと2人に話していた。すると2人は「大変なのは当然だよ。いつも頑張っている姿を見ていたから、むしろ楽しいと話している有紗がすごいと感じていた。」と言ってくれた。誰かにインターンでの作業を認めてもらったのは初めてだった。思わず泣いてしまった。このとき実際に就職して働くことを想像した。報酬だけでなく、このように温かい気持ちになれるかなれないかで充実感が変わると強く感じた。

インターンの仕事以外にも私は貴重な体験をした。それは動物たちとの触れ合いだ。ほぼ毎日何かしらの動物たちの食事を手伝っていた。動物につけた手綱を持って芝生があるところに連れていった。アルパカには手で草を千切ったものをあげることもできた。時々恐怖を覚えたけれど、動物たちはいつも癒しを与えてくれた。

私が帰国する前日の夕飯のときにロスが「有紗のようなワークステイの子が明日から来る。」と言っていた。私は冗談で「きっと私より良いファーマーが来るよ。」と言ったらリンディーとロスは「あなたはとても立派なファーマーだった。」と言ってくれた。日本人の感覚で言うとお世辞だったのかもしれないが、とても嬉しかった。私はウィルソン夫妻のもとで1週間お世話になった。とても短く感じた。今度は働いてお金を貯め、休暇でファームステイに行こうと考えている。

最後にファームステイを受け入れてくれたウィルソン夫妻。私に様々なことを経験させてくれたアーサー。ファームステイを設定してくれた現地スタッフの方々。私の生活をより充実させてくれたマサエとサヤカ、そして動物たちに感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとう！